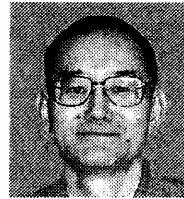


◆旅順虐殺 過去の「事実」学び 真摯に



今夏、中国の上海・南京・大連・旅順に日本軍の侵略の足跡を訪ねるフィールドワークに20人で出かけた。「神戸・南京をむすぶ会」主催のもので今年が7回目となる。毎年南京大虐殺の現場と、もう1カ所を訪ねることにしている。

今年、日清戦争時の日本軍による「旅順虐殺」をもうひとつのテーマとして旅順・大連を訪問した。この旅順虐殺については、加藤周一氏が1988年8月23日付本紙夕刊の「夕陽爰

ひだ 飛田 雄一 神戸学生青年センター館長

語「欄」『南京』さかのぼって「旅順」で触れている。戦闘が終了したのちに、旅順と南京で民間人に対する虐殺が行われたが、加藤氏は、この二つの事件は、海外でよく知られた事件だが、日本政府が日本人に知らせようとせず、責任の所在を明らかにしようとしなかったことが共通している」と述べ、旅順虐殺が南京大虐殺につながったとしている。

また神戸時代のラフカディオ・ハーン(小泉八雲)も「神戸クロニクル」(1894年12月7日付)紙上で「日本軍の行為はなんの言い訳も受け入れられないであろう。(中略)婦人、子供や非戦闘員に対する必要な残虐行為については、その行為を犯した者たちの行動に責任を負う将校たちを厳格に罰するべきである」と批判している。

近年、旅順は203高地などが観光地化されて多くの日本人が訪れているが、この旅順虐殺に思いをはせる訪問はあまりないようである。私たちは、外国人にはまだ開放されていない、旅順虐殺犠牲者を葬った「萬忠墓」、それに伊藤博文をハルビンで射殺した安重根が処刑された旅順監獄も見学した。私たちが今もなお学ばべき過去の「事実」が多いことを教えてくれた旅であった。

いま日中関係は、経済面では順調といえるが、政治的な関係は小泉首相の靖国神社参拝問題などでギクシヤクシヤしている。靖国問題は中国側の過剰反応だという意見もあるが、東条英機らA級戦犯らも祭っている靖国神社に小泉首相が参拝することは、かつて日本に侵略され多くの被害を受けた中国人には許すことができないものだ。ドイツの現在の大統領がヒトラーの墓に参る行為と同じように映っていると言えは、少しは納得していただけだろう。日中問題の解決には、日本側の過去の歴史を踏まえた真摯な態度が不可欠であると思う。